巻頭言

コロナ禍の中で学生たちと向き合いながら

臨床心理学部　学部長　香　川　　克

臨床心理学研究報告　第13集が刊行されることになりました。

この1年間を振り返ると、あえて触れないようにしようとしても、どうしても、コロナ禍の影響を強く受けたことに触れないわけにいかなくなります。臨床心理学部の教員のみなさんも、コロナ禍の中、学生たちと真摯に向き合いながら教育活動を行い、同時に、研究活動を遂行してこられました。今号には、その先生方のご尽力の成果が掲載されています。

コロナ禍の影響で、私たちの生活や私たちの社会がどのような変化を被るのかについては、現時点では、予測不能であろうと思われます。とはいえ、なんらかの「見通しのようなもの」を持とうとすること、予測しようと努めることも必要でしょう。予測しつつも、その予測が予測でしかないことにも目を向けながら、この変化の向こう岸に広がるであろう新しい社会やそこでの生活の形を作っていくことが、私たちには求められています。

人間の営為について、心の深層へのまなざしを深く向け続けながら、痛みや苦しみの中にある方々への関わりを続けていくことをミッションとしている私たち京都文教大学臨床心理学部の活動が、新しい世界のあり方にどのようにかかわっていくことになるのか。これからも、一層の研究の積み重ねが求められます。継続的にとりくんでいくためにも、本研究報告の継承と発展が求められていると考えております。